

座談会



●なむぐん・ほう氏

2007年慶大卒。総合病院国保旭中央病院、慶大医学部呼吸器内科を経て、18年から米国国立衛生研究所に留学。21年4月より現職。新型コロナウイルスから社会を守る時限的な緊急プロジェクト「コロナ制圧タスクフォース」のメンバー。同研究チームにて、COVID-19の重症化にかかわる遺伝子(DOCK2)の同定に成功する。JST さきがけ研究員(兼任)としてネクストパンデミックの研究体制基盤構築に取り組む。

今後の感染症医の可能性を伝えていきたいです。

南宮 次世代の教育は重要ですね。私も将来的には、基礎研究の成果を医療現場で実用化することをめざしたトランスレーショナルリサーチに、自施設に限らず日本中の若手を起用して、海外でOJTできる機会を創出できたらと考えています。

斎藤 グローバルヘルスに貢献できるポストを大学や病院などさまざまな機関で確保しておくことも重要ではないでしょうか。臨床医・感染症医の活躍の場がこれだけ広がっているにもかかわらず、海外との共同研究に日本から参加できるポストは依然として少ないままです。

南宮 グローバルヘルスにかかわりたい医療者は、国立国際医療研究センターといった公的機関での勤務を志すことが一般的な従来のキャリアパスでした。一方で次のパンデミック時に各機関が連携しやすくするためには、国際的な視点を有する人材が多様なセクターに在籍していることが不可欠です。グローバルヘルスに貢献できる医療者の絶対数を増やしていきたいです。國井 同感です。今後はもっと多くの

方々にグローバルヘルス分野で活躍していただき、「健康危機から世界を守ることは日本の臨床現場にとってもメリットがある」と感じられるようになってほしいです。

次世代の医療者に伝えたい タテ・ヨコ・そろばん

國井 将来への対策を立てるには「タテ・ヨコ・そろばん」が重要です。タテは歴史から学ぶこと、ヨコは海外の対応から学ぶこと、そろばんはデータやエビデンスから学ぶことを意味します。コロナ禍での経験や諸外国の対応を踏まえて、次のパンデミックまでに次世代の医療者に伝えたいことがあれば教えてください。

大曲 COVID-19の症状や疫学的特徴を感染拡大早期にまとめたChenらの報告²⁾は、その速報性と希少性から世界中の論文に引用されました。新興感染症の流行時は、発生早期からの臨床情報の収集が重要なため、研究開発を「自分事」としてとらえる医療者が増えることを期待しています。

斎藤 諸外国と日本の対応を比較した際に、医療機関や行政、自治体、保健所、民間企業などさまざまなステークホルダーのつなぎ役となる存在が重要だと感じました。今後はそうした役割を担えるポストが増えて、国内の臨床研究を引っ張ってほしいと思います。

南宮 若い臨床医が積極的に海外との共同研究に参加して、最先端の知識やノウハウを学んで日本に持ち帰ってくれたらうれしく思います。慣れないうちは気後れしてしまうかもしれませんが、共通した研究目標に向かって試行錯誤することはこの上なく楽しい経験だと伝えたいです。

國井 コロナ禍から得た教訓や学びを具体的な提言や行動計画に移して、今後の臨床試験・研究体制を前進させていってほしいです。次のパンデミックでは100日以内にMCMを開発する。それを目標に皆で頑張りましょう。(了)

●参考文献・URL

- 1) G7. 100 Days Mission to respond to future pandemic threats. 2021. https://onl.tw/GSiaVat
2) Lancet. 2020 [PMID : 32007143]

視点

「患者中心のがんチーム医療」をJ-TOPで学ぶ



土屋 雅美 宮城県立がんセンター薬剤部/Japan TeamOncology Program 議長

医療現場で働いていると、「チーム医療」という言葉をよく耳にします。チーム医療にもサイエンスがあり、必要なスキルセットが存在します。われわれJ-TOP (Japan TeamOncology Program) では、「チーム医療を科学的にとらえる」ことを一つの命題としています。具体的にはチームが形成、円熟し解散するまでのプロセスをタックマンモデル(図)の概念を通じてとらえています。チームとしてのミッションとビジョン、ゴールを明確にすることの重要性をワークショップやセミナー、短期留学プログラムなどを通じて伝えることで、「患者中心のがんチーム医療」が実践できる医療者を育成すべく、2002年から活動を続けています。

本稿ではJ-TOPのワークショップにおける3つの特徴を紹介します。

①チーム医療の実践に必要なスキルセットを座学で学び、実践できる

われわれのワークショップを強く特徴づける要素です。積極的傾聴の手法や、心理的安全性が保たれた環境作り、対立が起こった時のコンフリクトマネジメント(註)の手法などを学び、学んだスキルを活用してグループワークを通して問題解決に取り組みます。

②リーダーシップ教育やキャリア形成について学ぶことができる

J-TOPの活動における目玉の一つであり、ワークショップを通して個々に適したリーダーシップスタイルを見いだします。また、J-TOPではさまざまな経歴、経験を持った各分野のリーダー的存在である先生方が活動しており、このような方々から継続的にキャリア形成について学ぶこともできます。

③患者参加型である

J-TOPのワークショップには、毎回必ずがんサバイバーさんが参加してい

ます。がんに関する教育・研究・臨床実践プログラムを考えるグループワークの際、患者さん自身の視点・考え方を共有します。これは、医療者が独り善がりにならないために非常に重要であり、患者中心のがんチーム医療を実践するために必要不可欠だと考えています。

*

J-TOPのワークショップに参加した方々は、今それぞれの地域や施設でがん領域のリーダーとして活躍しています。近年では台湾や韓国、フィリピン、タイ、ベトナムなどからも参加者が集まるようになり、J-TOPでチーム医療を学んだのち自国でその普及に貢献しています。台湾でT-TOP (Taiwan TeamOncology Program) や、ベトナムでV-TOP (Vietnam TeamOncology Program) ワークショップが開催されるなど、チームオンコロジーの輪はアジア圏にも広がっています。

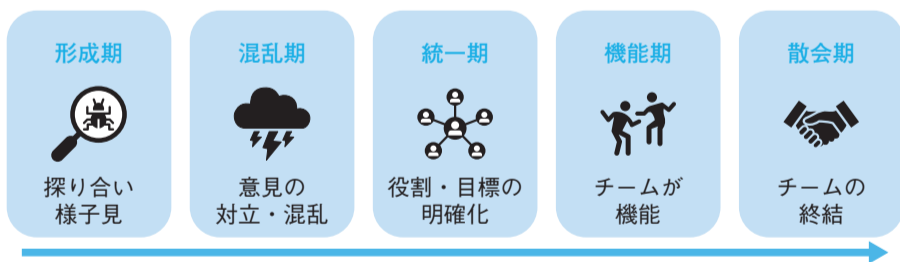
今年度のワークショップは2024年1月28日(オンライン)、2月10~12日(東京都内)の開催を予定しています。ぜひJ-TOPのウェブサイト(https://www.teamoncology.com/)をチェックしてみてください。

註:組織内で意見の対立が起きた時、組織の活性化や成長機会ととらえ、積極的に問題解決を図ろうとする取り組み。

●参考文献

- 1) Psychol Bull. 1965 [PMID : 14314073]

●つちや・まさみ氏/2007年東北大学薬学部を卒業後、同大病院薬剤部を経て、13年より現職。18年には米テキサス大MDアンダーソンがんセンターに短期留学した。20年東北大学院修了。博士(薬学)。がん専門薬剤師。22年からはJ-TOP議長を務める。編著に『がん化学療法レジメン管理マニュアル第4版』(医学書院)ほか。



●図 タックマンモデルの概念図(文献1をもとに作成)
心理学者のブルース・W・タックマンが1965年に提唱した成長の段階を表したモデル。チームを形成した後、混乱や対立等、さまざまな段階を経ることで高いパフォーマンスを発揮する理想的な組織へと成長するとされる。

Advertisement for the book 'ココロが動く医療コミュニケーション読本' (Heart Moves Medical Communication Reading Book) by Shun Nakajima. Includes QR code and book cover image.

Advertisement for the 'Medical Library ID' registration service, highlighting that registration is free.

Advertisement for the 4th edition of 'Cancer Chemotherapy Regimen Management Manual', edited by Masami Tsuchiya and others.